

「はなみずき」をはじめて知ったのは、大学生になってからだった。二階の部屋から見た上向きの白い花は、新入生を迎え入れたばかりのキャンパスに色彩を加えていた。

幹に括り付けられていた札に英名「Dog wood」とあり、どうも日本原産ではなさそうだとの連想とともに、なぜ「犬？」という疑問も頭について回った。

卒業してからは、「はなみずき」にさしたる関心も寄せずに過ごしていた。ところが10年程前、あのヒット曲とともに、頭の隅にあった記憶と疑問がよみがえった。

ネットなどで「はなみずき」を改めて調べると、こういう経緯があるようだ。1912年に東京市長の尾崎行雄が、米国・ワシントンにソメイヨシノ(桜)を寄贈し、その返礼として、1915年に北米原産の「はなみずき」が贈られ、初めて日本に植栽された。その後、全国的に普及が進んだ。確かに街路樹として目にすることが増えた気がする。私が居住する市の木である

ことも今回のネット調査で判明し驚いた。付け加えると樹汁が犬の皮膚病に効くので英名にはDogと冠せられているのとのこと。

時代の心情を投影した「はなみずき」の歌詞

2004年2月にリリースされた「青窈の「ハナミズキ」は、いまでもカラオケ人気ランキングの上位に名を連ねる。9・11テロに触発されて作詞したというが、歌う人ごとに異なる心象風景を呼び起こす歌詞がロングヒットの背景にありそうだった。「お先にゆきなさい」「僕の我慢がいつか実を結び」等、謙譲・忍耐といった日本人の美德といわれる気質を、やさしく肯定する言葉が連なる。

バブル崩壊後の閉塞感から脱しきれず、デフレが定着しつつあった10年前。「我慢」して、とにかく乗り切ることが求められる時代の雰囲気 matches して、中高年にもその支持層を拡大させていったのではないだろうか。不良債権処理に当たった金融関係の人と懇談したとき、「今

の心情～「はなみずき」



独立行政法人 労働政策研究・研修機構 調査・解析部長

荻野 登 おぎの のぼる

1982年日本労働協会入職、在米テロイト日本国総領事館勤務(94～97年)、「週刊労働ニュース」編集長などを経て、2003年独立行政法人労働政策研究・研修機構発足とともに調査部主任調査員、調査・解析部次長(月刊「ビジネス・レーパー・トレンド」編集長)を経て、2011年4月から現職。

の人は本当に恵まれているな」と本音がもれた。ドラマとしての誇張があるとはいえ、「半沢直樹」的な仕事を強いられたという。まず、会社建て直しのためには、この荒波を「我慢」して渡りきらない限り、次には進めない状況にあった。正社員採用も抑制され、自分がやるしかなかった。いまは、新規採用も安定し、大切に育てられる。荒波を渡り、修羅場をくぐった人からすると、やはり今は恵まれているという感を強くするのだろうか。

「なぜ日本の労組は賃上げを要求しないのか？」

「我慢」については、こんなこともあった。

数年前、労使紛争が何かと話題になる韓国・現代自動車の労組と懇談した。日本の大手自動車メーカーも1950年代には長期のストライキなどを打つなど、組合が先鋭化し、労使対立の時代を経て、いまの安定的な労使関係を築いてきたことなどを説明したが、得心した表情はみられない。これに対して出

SQUARE

てくる質問は、「各社利益を上げていくのに、なぜ組合は賃上げ要求をしないのか」だった。デフレから脱却できておらず、リーマンショック、東日本大震災の影響も残っていたころなので、組合もなかなか要求に踏み切れないと解説しても、やはり、納得した様子はみられない。追い詰められて、つい口から出たのが、「我慢つよいからではないでしょうか」。理屈ではなく、こ

う説明するしか術がなかった。バブル崩壊以降、円高の進行と新興国の追い上げで、日本の製造業の国際競争力は危機に直面する。2000年に入

り、ITバブル崩壊が追い討ちをかけ、雇用の安定・維持が労使にとって最優先の課題となった。日本経済の再生にとっても債務・雇用・設備の3つの過剰の解消が至上命題だった。労働側が全体で賃上げを求めるとは、事実上、困難な時期が長く続いた。

人員が厳しく切り詰められるなか、この時期の労使交渉で労働側は「とにかく、現場の頑張りによってほしい」と主張していたように思う。「現場」の「頑張り」は、やはり「我慢」の気質が下支えしていた。「我慢」していれば、大波はいずれおさまる。「現場」「頑張り」「我慢」のローマ字の頭文字をとると3つのG。歌詞本来の世界観とは異なるが、この「3G」に支えられた働く人の心情を「はなみずき」は表現していたような気がする。

「3G」から「4G」へー
職場に「元氣」を取り戻そう

人件費抑制のため、現場における我慢が目に見える形で表面化してきたのが、非正規の増大だろう。2000年の非正規労働

3Gに支えられた働く人

働者は1273万人(26・0%)だったが、昨年11月の労働力調査によると、非正規労働者(原数値)が前年同月に比べ48万人増えて、初めて2000万人(38・0%)を超えた。

メディアはこの非正規2000万人超を大きく取り上げた。しかし、足元では別の変化が芽吹きつつある。昨年、9月から正規雇用が前年同月に比べて、プラス(36万人増)に転じ、11月は一旦マイナスとなったものの、今年1月は同比で31万人の増加となっている。この正社員増加が一時的な動きなのかどうか、今後の推移を見なければ分からないものの、リーマンショック直前の2006年と2007年にも前年比で、それぞれ40万人、34万人と正社員数が増加した経過がある。

この変化の背景としては、人手不足が大きい。サービスの質向上と人材困り込みのために、ANA、ユニクロ、イケア、スターバックスを先駆けとして、パート・契約社員などを正社員化する動きが進んでいる。雇用統計上も、非正規先行で改善が著しかった有効求人倍率が、正社員

求人増加を伴う形で上昇している。高校卒・大学卒の就職内定状況も非常に高い水準で推移するなど、両統計ともバブル期に並ぶほどの数値まで高まっている。

当機構が実施した複数の調査でも、今後3〜5年を展望したときに、正社員を増やすという回答が減らすとする企業を上回っている。今後の新たな事業展開を考えると、正社員が欠かせないとする意見が多い。「我慢」の殻を打ち破ろうとしている企業が増えていることは間違いない。今春交渉では、賃上げ・雇用両面で職場の「元氣」(第四のG)につながるような成果を従業員は待ち望んでいるだろう。

一昨年、久しぶりにキャンペーンを訪れたが、あの「はなみずき」は消え去っていた。部室の改築で撤去されたらしい。とはいえ、待ち焦がれた春をまず彩るのは、見頃が4月下旬〜5月上旬の「はなみずき」ではなく、「桜」。交渉の成果を着に職場の仲間と花見に出かけるのも、「元氣」を取り戻すきっかけになるかもしれない。